

総 説

第34回地盤工学研究発表会を実施して

龍岡文夫 (たつおか ふみお)

東京大学教授 大学院工学系研究科社会基盤工学専攻

1. はじめに

学術団体である地盤工学会にとって、会員の意見交換・情報獲得と伝播の機会として、年一度の研究発表会の開催は、欠かすことが出来ない。先進各国でも開発途上国でも日本以外の国で、熟達した技術者・年長の大学教官と新入社員・大学院生が論文発表・討議に対して同一の権利を持ち、毎年1000人余の研究者・技術者が発表し2000ページあまりの論文集が印刷され、2000人余もの多数の参加者があるような地盤工学シンポジウムはない。情報の質に精粗がありすぎる等この形態に批判はあるが、大量の技術・学術情報の伝達の素早さと広がりの点から見て、本研究発表会は地盤工学会が誇るべき伝統であり、そのきちんとした実施は最大の責務の一つである。

本年度は、上記の通常の責務に加えて地盤工学会創立50周年記念行事が同時に行われることになり、早い時期から準備に入った。

2. 組織

実行委員長としての最初で最も重要な仕事は、組織作りであった。組織の根幹は「形態」と「人」とあると考え、また「身軽で実行力のある組織」という方針で、総務・行事・学術3部会だけとして、それぞれの北誥昌樹氏(運輸省港湾技術研究所土質部)、三木博史氏(建設省土木研究所材料施工部)、日下部治教授(東京工業大学工学部)にお願いした。また、委員長の補佐役である副委員長を、巻内勝彦教授(日本大学理工学部)にお願いした。結果として、これほどの適任者はいなかった。部会員の人選は、各部会長にお願いした。組織図(表1)に示すとおり、非常に有能で誠実な方々に参加していただくことが出来た。これらの方の献身的な縁の下の力持ちの作業がなかったならば、この大事業の実施は不可能であった。単なる義務心では、このような奉仕活動は到底不可能である。非常に多くの方が地盤工学会を愛していて必要としていることを実感できた。

3. 手作りか外注か?

手作りの運営か外注でプロ任せの運営かは議論の分かれところであるが、ポストバブルの今日、資金力に任せて学会実施上の判断作業まで外注化する運営はできな

表1 第34回地盤工学会研究発表会実行委員会組織図

部会名	役職	名前	会社名
行事	委員長	龍岡文夫	東京大学
	副委員長	巻内勝彦	日本大学
	部会長	三木博史	建設省土木研究所
	副部会長	川井田実	日本道路公団
	副部会長代理	服部隆行	基礎地盤コンサルタンツ(株)
	副部会長代理	福田健一	中央開発㈱
	部員	大越盛幸	建設省土木研究所
	部員	荻原光躬	建設省関東地方建設局
	部員	鬼木剛一	鹿島建設㈱
	部員	小宮一仁	千葉工業大学
講演	部員	斎藤亮	首都高速道路公団
	部員	中村裕昭	㈱地研コンサルタンツ
	部員	森田年一	運輸省港湾技術研究所
	部員	山口嘉一	建設省土木研究所
	部員	窪田達郎	㈱建設企画コンサルタント
	部員	稻垣太浩	日本道路公団
	部員	小畠敏子	建設省土木研究所
	部員	古本一司	建設省土木研究所
	部会長	日下部治	東京工業大学
	副部会長	中井正一	千葉大学
総務	部会長代理	桑野二郎	東京工業大学
	部員	加藤誠	東京農工大学
	部員	岡田哲実	㈱電力中央研究所
	部員	菊池喜昭	運輸省港湾技術研究所
	部員	桑野玲子	東京大学大学院
	部員	神田政幸	㈱鉄道総合研究所
	部員	鈴木輝一	埼玉大学
	部員	園田紘史	芝浦工業大学
	部員	西村和夫	東京都立大学大学院
	部員	峯岸邦夫	日本大学

い。しかしながらよりも、

- 研究発表会に参加する学会員と同じ立場であり同じ感覚を持った学会員による運営の方が、参加者に対して暖かい運営が出来ること、
- 若い方がこのような学会運営を経験することによ

り、次世代に経験が伝達できること、
 3) 運営活動を通じてほかの学会員と知り合いになり、
 学会内の風通しが良くなること、
 の重要性を考えると、手作り運営の良さを捨てることは
 出来ない。したがって、研究発表会の運営方針の決定、
 計画策定、判断、外部機関に対する依頼、会員との対応
 等の肝心の作業は、すべて実行委員会で行った。しかし、
 会議・展示会参加登録や会場の設営等の単純作業は、餅
 屋の専門家に任せたほうが、はるかに時間と費用の節約
 になるのは事実である。

4. 会 場

研究発表会の開催地の選択には、最も難しい判断を必要とした。地方の支部の方々が、財政・組織・開催場所に関して血の滲むような努力をなされて研究発表会を開催なさっていることを考えると、安い贅沢は許されない。しかし、今回は通常の研究発表会に加えて、充実した技術展示会・創立50周年記念特別講演会・記念式典・50周年懇親会も同時に開催する方針であったことが、会場選びの最大の制約条件になった。都内でのこれらの行事を開催しようとすると、開催場所が相当分散し、参加者にとって非常に苦痛となる。また、都内の大学は一般に手狭であり、7月末まで学期中である大学が多い。会場借り上げ費自体は低い会場候補もあったが、参加者にとって足の便が非常に悪くなるので断念した。最後は一大決断をして、条件が揃っていた東京 Big Sight を選択した。諸々の条件を考えると、無謀な贅沢ではなかったと考えている。

5. 財 政

この景気の状態で、企業に過大な負担をお願いはできない。また、参加者の負担増は出来るだけ避けなければならない。このため、実行委員会の運営は、E-mail 通信等を活用し、また責任者の判断を尊重するなどして会議数を極力減らし、運営を徹底的にスリム化した。また、研究発表会の運営もアルバイト学生の数を大幅に減らす等、運営を可能な限り合理化した。それでも、参加費を一人あたり1 000円だけ増加させていただいたが、これ

は記念講演会・拡充した展示会への参加費を無料にするための負担増であったと、理解をお願いしたい。またこれに関しては、技術展示参加を了承していただいた133の機関に、心よりお礼を申し上げたい。

なお、研究発表会の開始時点での予定収入の80%（展示会関係を除くと51%）しか確保されていないと言う現在の方式は、担当者にとって苦痛である。特に懇親会の参加者数の予測は、胃が痛くなる。懇親会をもっとあっさりしたものにして予算規模を小さくしたり、研究発表会開催数日前までの研究発表会・懇親会の予約を割引にして予約数を確保するなど、考慮の余地が多いと思われる。

6. 当日の運営

行事部会、学術部会の担当者の努力により、運営は非常に上手くいったと言って良いと思う。しかし、理想から言えばいろいろ問題点はあったと思う。

- 1) 今回は50周年記念行事の時間も確保しなくてはならず、時間枠のやりくりが非常に苦しかった。このため、昼食時間が短すぎるなど自由時間が少なく、参加者にとって研究発表会に熱心に参加すると技術展示を見る時間が無くなる、と言う事態となった。
- 2) 発表会場や技術展示会場が分散していたため、会場間の移動に時間を要した。そのため、技術展示場への足が遠くなってしまった。
- 3) 会場に不慣れな点もあり、見学会の集合場所などに不都合が生じた。
- 4) 会員／非会員の差別化が明確ではなく、法人会員への利益が少ない（例えば、展示参加費に関しても法人会員／非会員、またそのレベルによる差がない）。

7. おわりに

終わってみると、あれをこうすれば良かった、あれは判断ミスであった、と言うことも多かった。参加者の方々からも、いろいろ意見を頂戴した。これらの経験が、次回の開催に役に立つことを祈る。

（原稿受理 1999.8.17）